

「縮小する世間」とマナーの局所化 —他者がいることの意味—

HS22-0111K 山内 夏穂

目次

はじめに

第一章 電車内マナーと人々の意識

第一節 外部と内部をつなぐ電話

第二節 携帯電話での通話と公的な空間

第三節 電車内での化粧と他者

第二章 マナー違反と意識の差

第一節 マナー違反者の「恥」意識

第二節 プライベートな空間

第三節 携帯電話マナーの変化と公私の意識

第三章 人々の空間認識の変化

第一節 「ウチ」と「ソト」

第二節 準拠集団としての世間

第三節 世間が持つ性質

第四節 「セケン」の縮小

第四章 集団主義とマナーの関係

第一節 日本＝集団主義というイメージ

第二節 日本は集団主義ではない

第三節 集団主義イメージの発端

第四節 「ミウチ世間」と現代

おわりに

＜主要参考文献＞

はじめに

電車内マナーの代表格に、「車内では携帯電話での通話を控える」というものがある。このマナーは、着信音や話し声などの騒音を防止するだけでなく、電車内という共有された空間の均衡を保つ働きがあるのではないか。電話が外部と接続するメディアであることに注目し、そのマナーの意義を検証したい。

これを契機として、空間の共有の問題から浮かび上がる「世間」の考え方に注目し、人々のマナーに対する意識の変化を探っていく。そこから、マナー向上に必要なもの、人間にとって他者とはどのような存在なのかを考えてみたい。

第一章 電車内マナーと人々の意識

はじめに携帯電話の機能に注目し、電車内での通話の人々に与える不快感について論じる。

電話の歴史をたどると、携帯電話以前の固定電話の時代から共同体のなかで使用することがためらわれてきた。このような電話を電車内のような共有空間で用いると、自分と外部という私的な空間に閉じこもることになる。このとき、周囲にいる人は自身が他者としてみなされていない、存在を無視された感覚を覚える。これが電車内での通話を目にした時の、騒音以外から得る不快感といえる。このような不快感を生まないために、「電車内で通話しない」というルールが存在しているのであろう。

第二章 マナー違反と意識の差

本章では、マナー違反者はその行為に対して、どのように考えているのかを「恥」意識に注目し考察した。

「恥」には、周りからの目を気にすることから生まれる「公恥」と自分の中で一人恥じる「私恥」の二つがあるという。人々はこの二種類の「恥」を意識しながら、それによって公共の場での振る舞いを統制しているのである。そして、この「恥」の規範に差が生まれると、マナーが悪化したように感じられる。

この「恥」意識の変化は、携帯電話の利用意識にも変化を起している。さらに注目すべきなのは、公共の場において周囲よりも自分の身近な友人などに気をつかうようになったということである。その結果、周囲に対しては傍若無人な行動をとってしまう。筆者はこのことについて、公的な空間と私的な空間の境界が曖昧になっていることが原因であると考えた。

第三章 人々の空間認識の変化

公的な空間と私的な空間の境界が曖昧になった理由を、日本独特の「世間」の考え方をを用いて考察していく。

世間についての記述が詳しい井上の論によれば、世間とは行動の拠り所となる準拠集団であるという。この世間を、社会心理学者の井上忠司は、「ミウチ」「セケン」「タニン」の三つを挙げて論じている。まず「ミウチ」とは、家族などの親しい関係である。その対極に位置しているのが、自分とは全く関係のない「タニン」であり、その中間に位置するのが「セケン」なのである。

筆者は、電車のような共有空間も世間ではないかと考える。お互いが心地よく過ごすために、共有空間ではそれなりの振る舞いが求められる。共有空間でのマナーの悪化は、この世間の範囲が縮小していることが原因として挙げられる。これまでは「今いる場所」が世間になることが多かったが、現在は「今繋がっている相手」が世間となっているのである。

このように小さくなった世間を、筆者は「ミウチ世間」と名付けた。言い換えれば、マナーの範囲が「世間」から「ミウチ世間」へと局所化したのである。

第四章 集団主義とマナーの関係

本章では、「世間」と同じく日本に対するイメージとして取り上げられる「集団主義」に注目した。

マナーの悪化を論じるとき、それを「日本人は個人主義的になった」と表現する人もいる。ならば、かつての日本は集団主義の国であったのであろうか。

実際、日本人が特別集団主義的な行動をするという実験結果は存在していない。

それでは、なぜ「日本＝集団主義」というイメージが生まれたのであろうか。ここにもやはり、「世間」が関係している。日本人は「世間」に準じて行動してきただけなのである。

つまり、日本人は集団主義から個人主義になったというよりは、自分に直接関係のある「ミウチ世間」にのみ配慮するようになったのである。

「ミウチ世間」ばかりに意識が向くようになった日本のマナーを考えると、そこに欠如しているのはコミュニケーションであろう。これまでは世間が共有空間でのクッション的役割を担ってきた。しかし、世間が縮小したことに

よって、かつての世間での振る舞い方が変化し、人々の衝突が起こっている。ならば、態度や視線で気付いてほしいと思うのではなく、一言声を掛けていくことで、より円滑に空間を共有できるのではないか。

おわりに

ここまで、電車内でのマナーを契機に共有空間での人々の意識の変化を探ってきた。そこから見えてきたのは、「今いる場所」よりも「今繋がっている相手」を優先する、「ミウチ世間」の存在であった。

「ミウチ世間」をはじめとする、共有空間での問題を考えるとき、そこに必要とされるのはコミュニケーションであろう。「ミウチ世間」にマナーが局所化したことによって、かつての広い世間に対して必要とされた煩わしさは軽減されたかもしれない。しかし、狭い「ミウチ世間」の中でのみ生きていけるわけではなく、その外側の他者がこの社会を形成している。

人の間で生きる「人間」であるからこそ、「ミウチ世間」の外側にも目を向け、声を掛けあうことが必要とされるのではないか。

<参考・引用文献（一部抜粋）>

- 阿部謹也（1995）『「世間」とは何か』（講談社現代新書 1262）、講談社
- 石川幹人（2000）「メディアがもたらす環境変容に関する意識調査—電車内の携帯電話使用を例にして—」、『情報文化学会論文誌』vol.7、No.1、pp.11-20
- 井上忠司（1977）『「世間体」の構造 社会心理学への試み』、日本放送出版協会
- 作田啓一（1967）『恥の文化再考』、筑摩書房
- 山岸俊男（2002）『心でっかちな日本人—集団主義という幻想』、日本経済新聞社
- 吉見俊哉（他）（1992）『メディアとしての電話』、弘文堂